

## 日本発達障害学会 第58回研究大会 報告

対面開催:2023年11月4日(土)~5日(日)

開催場所:京都教育大学

大会テーマ:「障害者を支える共生社会

—現代社会における知的障害・発達障害者のQOLを考える—

内容:大会実行委員長講演(小谷裕実)、特別講演(村木厚子)、学会企画シンポジウム(神尾陽子・村中智彦・宮田賢吾・池田顕吾・會田千重・井上雅彦)1題、実行委員会企画シンポジウム3題、教育講演8題、実践に役立つワークショップ2題、自主シンポジウム14題、ポスター発表82題

上記の通り、「日本発達障害学会第58回研究大会」の報告をいたします。

報告は、大会テーマに沿って「教育の現場での学びと課題」の視点より、受講講演を中心のレポートとさせていただきます。二日間にわたる講演等で情報量が多いことはもちろん、報告文作成にあたり、「流用」や「講演者の意図と異なる事」を避けることを優先と判断し、概要及び受講感想とさせていただきます。どうかご理解ください(必要に応じ、個別報告は可)。

\*報告に先立ち、ICF(国際生活機能分類:WHO)の図について、掲載させていただきます。 下記参照

▶ICFの概念図・構成要素間の相互作用

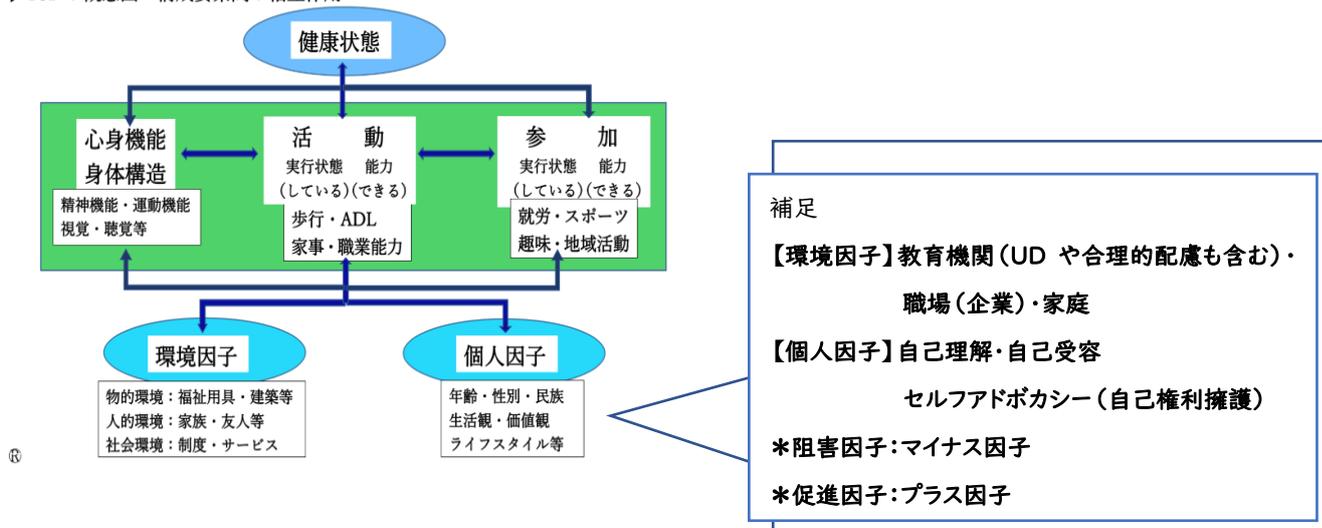


図: 特別支援学校学習指導要領解説自立活動編に引用された、具体例が入った概念図

### 概要及び受講感想

#### | 実行委員長講演 小谷 裕実 (京都教育大学)

「障害のある子どもたちとともに—医療と教育・福祉 手をとりあって—」

受講

これまでの診断通じ、障害者を支える共生社会の実現において多職種連携の大切さを具体例と共に説明された。また、医療的診断は「レッテル貼り」ではなく、『ICF(国際生活機能分類:WHO)』の「環境因子」へのアプローチであることを具体的に解説された。

「環境因子」の調整に着目すると、学校(保育園・幼稚園・諸学校)・職場(企業)・家庭が「促進因子」を増やし、「阻害

因子」を減らすよう調整すること。「個人因子」へのアプローチは、当事者が障害や特性をどのように理解しているのか、自分の人生を良いと感じられているか、「サポート」を受けるだけではなく、「セルフアドボカシー（当事者からの発信）」はできているか等である。「阻害因子」と「促進因子」を自己理解・自己受容やセルフアドボカシーの視点で調整することの大切さについても触れられた。

また、それぞれの分野が個々に支援するだけではなく、家族支援・障害理解や障害受容および特別支援教育や就労支援を行う「多職種の連携」があって有効な支援が実現する。学校・家庭・就労等、社会環境との相互作用についても触れ、環境調整ができればうまく適応できることを具体事例もあわせて紹介された。

また、**神経発達症の境界**についても言及されたが、「講演者の意図と異なる事」を避けるため、省略させていただいた。

## 特別講演

村木 厚子（元 厚生労働事務次官 現 津田塾大学客員教授）

### 「障害のある人とともに作る共生社会」

受講

障害者雇用に出会った際、「障害福祉施設の世界に、それよりも障害の軽い人の存在に気付いた」エピソードを紹介された。障害者基本法に対し、「私たちのことを私たち抜きで決めないで」という当事者の思いに触れ「支援してあげる人」と「支援する人」ではなく、**共に支える仲間である「共生社会」の理念**を確認された。

ある受刑者との出会いをきっかけに、受刑者たちの生育歴（虐待や貧困）、精神疾患、知的ボーダー、学歴などを知ることになる。軽度知的障害者にとって、「負の回転ドア（再犯）」を開けないためには、「保健・福祉・医療・労働・教育および司法」で暮らしを支えることや「居場所」づくりの課題など、多岐に渡り言及された。

「福祉の目指す方向」・「自立の概念」・「国際社会から見た、包括的成長や誰一人取り残さない SDGs」・

「変化の早い時代をどう生きるか・・・①学び続ける ②異なるものと繋がる」についての講演が続いた。

講演の中で、『自立とは、依存しないことではない。「自立」とはたくさんものに少しずつ依存できるようになることである（熊谷晋一郎）』という言葉が強く印象に残った。

## 実行委員会企画シンポジウム

企画・司会 佐藤 克敏（京都教育大学）

話題提供者 宮地 功（オムロン）

大石 裕一郎（就労支援センターステップアップむろまち）

松田 裕次郎（滋賀県発達障害者支援センター）

指定討論者 梅永 雄二（早稲田大学）

### 「発達障害者の社会的自立を支援するー生活と就労の視点からー」

受講

就労に関わる現場より3名を迎え、就労支援の現状の報告がなされた。

**大石氏より**：就労支援に際し、「肯定的評価」、「居場所づくり」や「適切な課題の設定」を「正のループ」とすることを前提とすることが説明された。その人のストロングスに着目し、強みを生かす「エンパワーメントの強化」、「相互理解と共感」や「信頼関係の構築」など環境整備の大切さについての報告があった。

**松田氏より**：滋賀の南北問題を始発点に、**県単位で一次～三次支援、福祉県域7つのネットワーク**で支援を行っていることが報告された。センター事業として、機関支援、啓発事業、啓発人権育成、地域支援（コンサルチーム巡回）、家族支援、相談支援が挙げられた。また、IOのライフスキル（WHO定義）に関わるライフスキルトレーニング、「生活スキル」「就労スキル」「社会生活スキル」を見極めることも言及された。ジョブカレを利用し、体験を通して自信を取り戻す取り組みも実施している。

**宮地氏より**：障害者雇用の企業での実態報告があった。グレーゾーンの方がクローズ（発達課題や特性を公にしない）

で入社後、発達の課題がわかることも多いと話された。企業での障害者雇用の実態や職場の問題から、環境整備（安心できる環境）作りや「インターンシップ（マッチングや時間をかける）」の意義についての報告があった。

話題提供を受け、梅永氏からは離職率、ハードスキルとソフトスキルの差・コンピテーションについて話された後、三者に対しそれぞれ質問があった。「人間関係の構築」「ライフスキルやニーズアセスメント」「援助要求スキル」重要性の大切さが伝わってくる内容だった。

\*具体的事例内容を割愛する。

## 教育講演 定本ゆきこ（京都少年鑑別所）

### 「司法領域における発達障害 日の当たらなかつたところに支援の光が」

受講

少年法（20歳未満）の基本理念（保護主義・個別主義・関係者の連絡、連携・秘密主義）と少年鑑別所（①生育歴②生活環境③資質の見極め→行動観察・面接と心理検査・身体科、精神科診察）についての説明があった。

少年法に抵触する子どもの「発達障害」「愛着課題」が3割～4割で、その約6割が未診断であること、ネグレクト等虐待が4割に迫り、9割が学校不適應である実態が具体的事例（発達特性や家族環境、未就学・誤学習の実態）と共に示された。ある鑑別所ではIQ60～80のグレーゾーンの子どもの多く、福祉サービスや教育的配慮から抜け落ち、特性を正しく理解されぬまま、二次障害（問題行動やトラウマなど）に至るケースなど、保護や支援がなされていない実態報告もされた。

非行事件の中で、「非行は1日にしてならず」（思春期で表面化する事件も、幼児・学童期の経過の中に必ずある、各々の要素が絡んで関連して発症する）という言葉に強いインパクトを受け、早期診断早期介入の必要性も痛感した。

少年「鑑別所」の診断を通し、「特性の正しい理解」と「家族への支援」が課題見られるという。「少年院」は構造化された「治療教育（トラウマ治療・発達促進・投薬）」の場であること、退院後の支援体制（サポートネットワークや手帳取得の勧め、社会福祉士の配置）についての説明もあった。

その他、少年院と刑務所との違い、再犯率の高さ（約5割）と刑務行政（現状と課題）について、また、少年をめぐる性情報による事件の課題にも触れられた。

まとめとして、少年法の目的は非行少年の「矯正教育」と「障害特性を見逃さず支援の視点をもつ環境調整」が大切であること。タイトルが示す様に、「社会福祉士の配置」「多職種連携の開始」「拘禁刑の実施（R7年6月改正刑法）」により、発達障害受刑者にもようやく光が…と話締めくくられた。

\*事例についてはすべて割愛する。

## 教育講演 片岡 美華（鹿児島大学 准教授）

### 「発達の視点を踏まえたセルフアドボカシーの力の育成、

### 発達障害のある人が自分らしく生きていくために」

オンデマンド

セルフアドボカシーとは、自己権利擁護（自分の権利を自分で守っていくこと）を指す。合理的配慮を求めることは、障害のある人の権利だが、「自分が何に困り、何をしたいのか、どうお願いしたらいいのか」わからない当事者が多い。自己理解とコミュニケーション力の視点からセルフアドボカシーを考察された。

ランドマークカレッジ（米）の学習事例を取り上げ、SAP（セルフアドボカシープログラム）を発達段階に応じて課題と共に解説をされた。詳しい内容は、著作権にも関わるため省略。

#### \*紹介書籍：

・「合理的配慮」の時代をたくましく生きるための理論と実践  
片岡美香・小島道生 編著 金子書房

・豊かな自己理解を育むキャリア教育 内面社会を大切にしたい授業プログラム45  
別府哲 監修 片岡美香・小島道生 編著 ジアース教育新社

日頃お世話になっている、指導主事 高松先生。iPad や iPhone を使った演習が行われました。  
センターでの講義、総育の研修にご参加ください。

### まとめと感想

今回の学会内容は、テーマ「障害者を支える共同社会」や「環境因子」を学校現場から、私自身が考え直す機会となりました。ここでの講義等は学校現場で「理想論」になりがちですが、世界的な潮流や研究が学校現場と少しでも近づけるために、教員が学び続けることの大切さも再認識しました。

講義を視聴した限りの私見ですが、学校現場での視点から見た、縦の発達は「キャリア発達支援」、横の支援は「教育・福祉・医療・保健・司法等の連携」と考えます。勿論、学校現場のチームでの支援は大前提です。「環境調整」の大切さと難しさを痛感する内容が多かったと感じます。

支援としての「促進因子」として、再度確認したいのが、「当事者理解・相互理解・自己肯定感・エンパワメント・ICT・セルフアドボカシーと合理的配慮や UD・ライフスキル・矯正教育、そして、サポートネットワーク等の多職種連携」。他にもまだまだ書ききれないほどの領域があると思います。

村木 厚子先生が話されたように「支援する人」と「支援してあげる人」という関係ではなく、テーマである相互理解に基づく「共同社会」の実現も教育現場での課題として受け止めました。果たして「当事者たちが声出せる環境に学校はなっているのだろうか」という素朴な疑問も残っています。

研究に現場が追い付くには、まだまだ時間が必要です。自分らしい生き方ができる環境を整え、学校が全ての子どもにとって安心安全な居場所になるよう、一步一步進んで行けたらと思います。

この度、被災に遭われました方々に心よりお見舞い申し上げます。

R6年1月

文責：嵯峨中学校 (巡回校 梅津中学校) 通級指導担当

特別支援専修免・学校心理士・ガイダンスカウンセラー 平林 文佳

※中し研だより次回は、城南中学校見学・LD 学会参加等のご報告をいたします。

### 【中し研より再度お知らせ】

- ◆ 日時： 令和6年 2月 6日(火) 16:30 ~ 18:00
- ◆ 会場： 京都市総合教育センター 1階 第2研修室 (集合研修)
- ◆ 内容： 「通常学級における指導困難な生徒の見立てと支援」

京都教育大学 教育創生リージョナルセンター機構 総合教育臨床センター

講師 鈴木 英太 先生

<事例提供> 京都市立花山中学校 通級指導教室担当 黒田未葉先生

- ◆ 参加対象： LD等支援教育部会員、特別支援教育に関心のある非会員

